

# 1 沿 革

堺の歴史は極めて古く、四ツ池遺跡などからその起源は遠く縄文時代後期にさかのぼり、また5世紀の前半には、この地に世界最大の陵墓である仁徳陵をはじめ数多くの古墳がその周辺に散在していることから古くからこの地方の開発が進んでいたことがうかがわれる。

“さかい”の地名が初めて文献にみえたのは、11世紀の中頃で、地名の由来は、堺の位置が摂津と和泉または摂津・河内・和泉の国境（堺の大部分は和泉の国に属する）にあったことによるものと思われる。

堺が急激に繁栄したのは中世の頃で、天然の良港を利用した対明貿易に始まり、海外交易によって巨万の富をなした堺商人の財力によって当時世界的にも先駆をなす自治都市を形成していた。このような背景のもとに、堺商人を中心に、茶道をはじめ香り高い文化が開花し、堺は文化的にも経済的にも国内随一の繁栄を謳歌した。

江戸時代に入って、徳川幕府の極端な鎖国政策が実施され、さらに大和川のつけかえにより流出する土砂のため河口が埋没した結果、堺港は貿易港としては致命的な打撃を受け、堺の商業的地位も衰退を余儀なくさせられた。

明治新政府の発足によって、大阪府から分かれてつくられた堺県は、近隣の県を順次併合し、和泉、河内、大和全域が堺県と呼ばれていた。しかし、明治14年堺県の廃止後大阪府の所属となり、明治22年4月市制町村制施行と同時に堺市が誕生した。

その後、周辺町村を合併し、順調に発展を続けてきた本市は、第2次大戦の戦火に遭い、市街地の大半が焦土と化した。戦後いち早く戦災復興に立ち上がり、懸命の努力の甲斐あって近代都市への転換が軌道に乗った。昭和30～40年代にかけては、重化学コンビナートを主体とする堺・泉北臨海工業地帯の造成、泉北ニュータウンをはじめとする大規模住宅団地の建設、さらには全市的な市街地の進行など、産業の発展と人口の増加が著しかったが、石油危機を契機とした経済の安定成長への移行に伴い、それまでの急激な人口増加は沈静化した。

平成元年、市制100周年を迎え、8年4月には中核市に移行した。

また、平成17年2月に、南河内郡美原町を編入し、18年4月に全国で15番目の政令指定都市へ移行した。

## 2 位 置（政策企画部 調査統計担当）

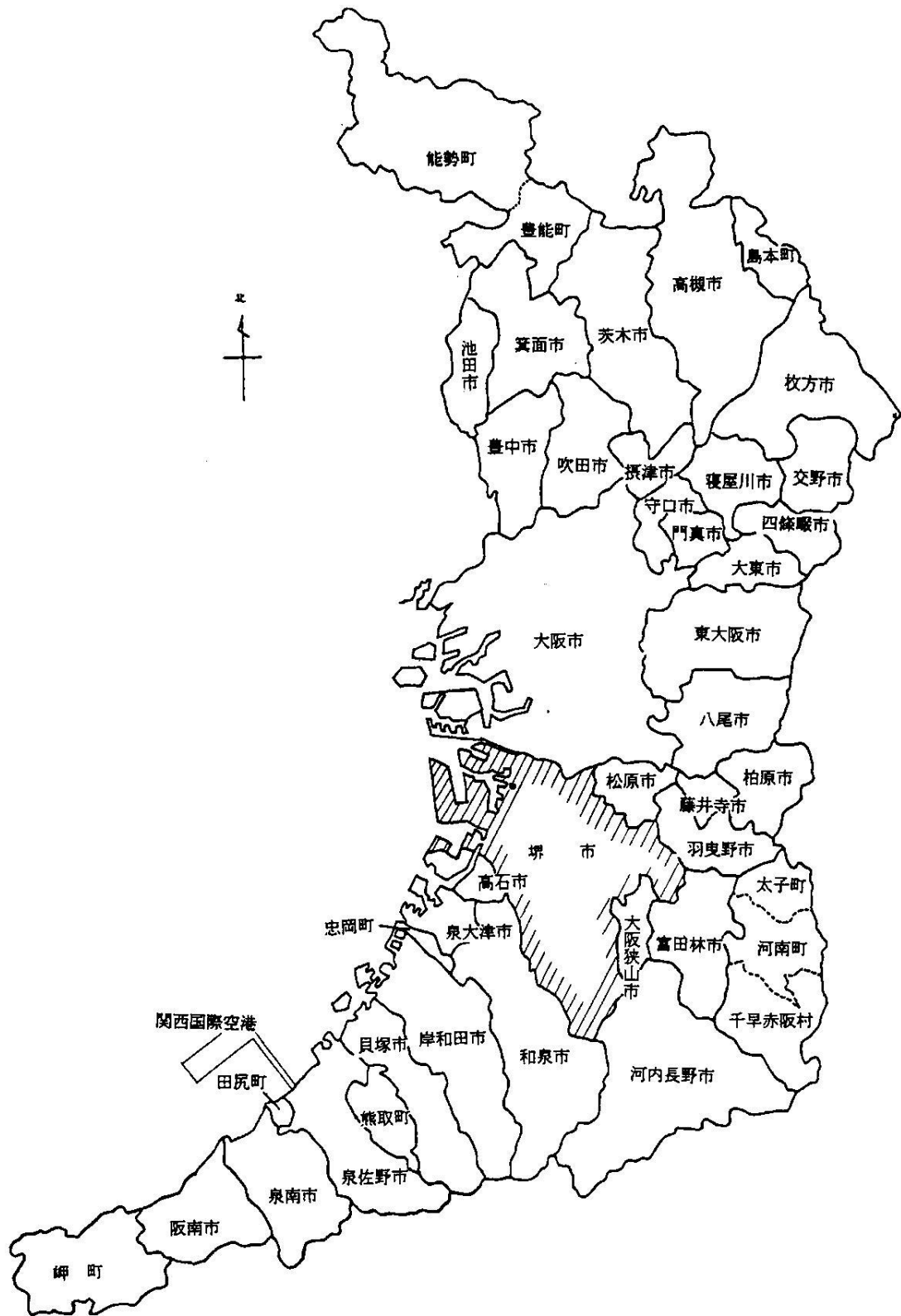
面 積 (02.10.1) 149.83 km<sup>2</sup>

位 置 東端 東経 135° 35' 15" 西端 東経 135° 24' 07"

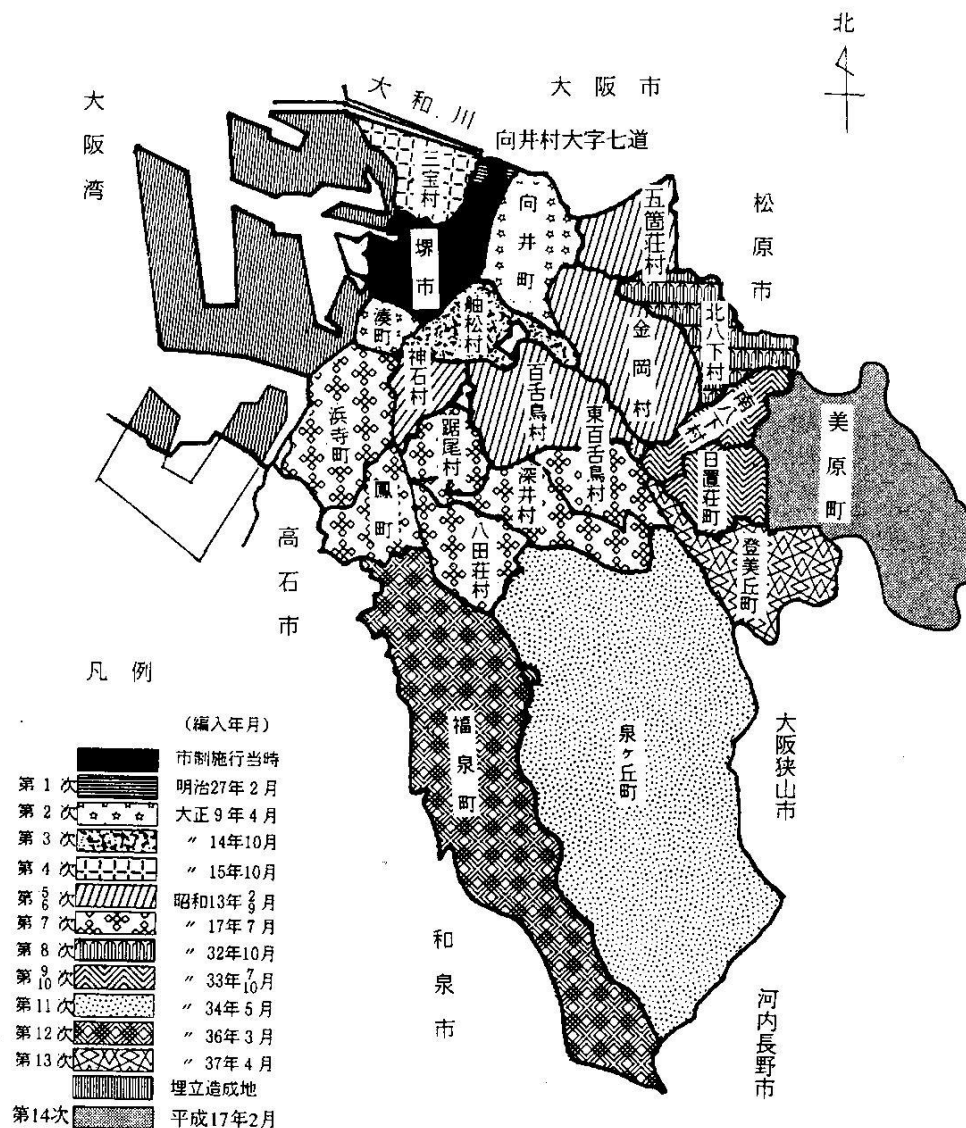
(02.4.1) 南端 北緯 34° 25' 48" 北端 北緯 34° 36' 31"

(注) 国土交通省国土地理院による。

位置図



### 3 市域の変遷 (政策企画部 広域連携担当)



明治22年4月1日市制施行当時の面積はわずか3.67km<sup>2</sup>であったが、27年2月に第1次の市域拡張として大鳥郡向井村大字七道を編入したのをはじめ、大正年間に3次にわたり市域の拡張を行った。

また、昭和においては、地方行政の進展に伴い行政区域の拡張が進み、13年2月泉北郡神石村の編入に続いて、同年9月泉北郡五箇荘村、百舌鳥村、南河内郡金岡村を編入した。

その後34年5月泉北郡泉ヶ丘町を編入、36年3月泉北郡福泉町を編入した。この両地域は編入した町村のうちで最も面積が広く、泉北ニュータウンはこの地域に位置している。

平成に入ってから、17年2月南河内郡美原町を編入した。

市制施行当初から14次にわたり市域の拡張を行い、22町村を編入し、公有水面の埋立てもあり本市の市域面積は149.83 km<sup>2</sup>となり、市制施行当時の約41倍となった。